

東雲色に輝いて

東雲姉弟スコスコ侍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オレの妹と弟可愛すぎない???

目次

三話	二話	一話
12	6	1

一話

突然だが諸君には兄弟、または姉妹などはいらるだろうか？世間一般的には兄弟とは基本的に仲が悪くなる傾向が多いと聞く。とはいえ、オレには目に入れても大丈夫なくらいに可愛い妹と弟がいる。この物語は、オレと可愛い妹と弟との生活を自慢するための物語だ。

★★★

朝、アラームが耳障りな音を立てて騒ぎムカつくくらい輝かしい太陽が顔をのぞかせるそんな時間にオレは眠い目をこすりながらニュースを流しつつ新聞を読んで弟を待っていた。

「…はよ」

「おはよう、彰人。飯出来てるぞ」

「…おう」

「…いや、やっぱ先に顔洗ってこい」

そう可愛い弟——東雲彰人に言うとならフラフラと洗面台に歩いていくのを眺める。彰人は妹——東雲絵名より生活リズムはきっちりとしているが、うちの家系は朝に弱い

しい、かく言う俺も別に朝に強い訳では無いが弟妹よりも早く起きていたいという兄貴の意地で目を覚ましているに過ぎないのだ。

「…ねっむ」

「ははは！今日は朝練だっけか？」

「おう…くっそ、朝練やめとくべきだったぜ…」

いつもはこれより一時間ほど後に起きてくるので、今日は特段眠いだろう。しかし、東雲彰人という人間は約束や借りは絶対に返す義理堅い人間なのでプライド的にサボりや寝過ごしは許せないらしい。オレだったら確実にサボってるけどね。

「バイクで送ってやろうか？」

「んあー…いや、やめとくわ」

「あいよ〜」

オレの誕生日が四月ということもあり、車やバイクの免許は既にとつてあるため送ろうかと言うがやめておくらしい。真面目だなあと笑いながら朝ごはんを掻っ込む俺。

「おし、ごちそーさん。…あ、そうだ彰人」

「んー？」

「今日風紀委員の荷物検査あるから捕まらねえようになー」

「げえっ、マジかよ」

「おう。まあオレが見つけたら見逃してやるけど他の奴らが見逃してくれるか分かんねえから気をつけろよ」

「…冬弥にも連絡入れとくか」

彰人はストリートミュージシャンであり、その相棒である青柳冬弥くんにも連絡を入れるそうだが、多分彼は大丈夫なんじゃないかなあ…？

「んじゃ、先に行くわ」

「おう、行つてら」

「おうよ」

風紀委員なので朝練をする連中よりも早く学校に着いておかなければならないので家を出る時間は彰人より早くなる。てか、こんな時間（朝の5:30）に学校行つて空いているのだろうか？

★★★

普通に空いてました。流石にオレが一番乗りだったようだが、パラパラと風紀委員たちが学校に来はじめている。

「真面目だねえ」

「一番最初に来てる先輩が言いますか？」

「早いな、白石」

「だからそれを先輩が言いますか？」

二番目に来たのは白石杏。一年生であり、彰人とユニットを組んでいる歌うま少女だ。一年生が二番目か……ふむ、三年生は弛んでるのか？

「ああそうだ、いつもの通りオレはあの二人を対応するから」

集まりだした風紀委員たちにそういうと明らかに安堵したような雰囲気広がる。横にいる白石はよく分かっている……というか、一年生たちはよく分かっていると思いが、この神高にはあるアホ二人がいる。

「変人ワンツーフイニツシュって呼ばれてるヤツらがいてな。神代類変人と天馬司変人の変人二人組だ。……まあ、悪い奴らじゃねえんだけどな」

見てるだけで頭が痛くなってくる二人組ではあるが、根はいい奴らなのだ。色んな方向に暴走しすぎではあるが。流石に天馬が空にぶつ飛ばされてた時はどうしたものかと頭を抱えたものだ。

「まあそんなところだな。朝練の連中がそろそろ来はじめるだろうから厳しくしすぎない程度でチェックするように。風紀委員長からは以上だ。解散！」

バラバラと風紀委員たちがバラけて荷物を検査していく。オレはサツと彰人の姿が見えたのでそちらに向かうと通っていいように告げる。

「あ、先輩彰人のことちゃんと調べました〜？」

「ははは、朝のうちに注意したから何も持ってきてねーだろうからな」
「うわっ、ズルくないですか？」

「ちなみに彰人は冬弥くんにも教えてたぞ」

「冬弥は調べる必要も無い気が…」

「うん、オレもそう思う」

「ですよねえ…」

天然だが素直で素行もいい青年。それが青柳冬弥という青年なのだ。

一話

相変わらず騒ぎ倒していた変人ワンツーフィニッシュを軽く叱ってから、その後俺も混ざって騒いだら生徒会長に怒られた。風紀委員長としての仕事は果たしたから良いと思うんだけどなあ…

「そう思わねえ？」

「…思わないしふざけてないで仕事して」

「へーへー…全く冷てえなあドライアイスかよ」

俺の目の前にいる無口無表情冷静沉着生徒会長こと薄明薊はくめいあざみの冷たい返しになんだかやる気が削がれる…が、まあいつものことなのでまあいいとして。

「とうか、なんで俺生徒会の仕事手伝わされてんの…？おかしくない？我風紀委員ぞ？」

「暇でしょ？」

「だからなに!？」

「…いいから、次の資料も手伝って」

「めんどくせえ…」

ポンポン手渡される資料に目を通してきつきと仕事を終えていく。ある程度仕事を終え目の疲れを癒そうと外の風景を眺めていると、チラツと見覚えのある髪色の知り合いが見えたような気がする。

「…どうしたの?」

「珍しい奴が学校に来てるからな、ちよつと話しかけてくる」

「…そう。行つてらっしゃい」

手元にあつた仕事を全て片付けると屋上の方へ向かつていったその知り合いの方へと足を運ぶ。屋上の扉を開けるとそこには見知つた顔の二人。

「おいおい、まーた屋上で逢い引きかあ?」

「うわあつ!?!…つて、先輩!その言葉中学の時から聞き飽きた!」

「おやあ、東雲先輩じゃないか。今朝ぶりだねえ」

「よお。類、瑞希…つて、相変わらず似合つてんなその服装」

「ふふくん!あつたり前でしょ?なんたつてボクだからね!」

胸を張つてドヤ顔を決めてきたのは暁山瑞希。サラツといる類と同じで同じ中学校後輩だつた。色々と苦勞してる二人だが気さえ許してもらえれば普通に接せる相手なのだ。…まあ、くだらん噂のせいで忌避してるヤツらの方が多いらしいが。

「というか、瑞希が来てるの珍しいな」

「ふふふ、そうだねえ。瑞希くんが来ることは珍しいからね」

「うっ、まあまあ！いいじゃんそれはさ！時々学校って来なくなるでしょ？」

「でもお前途中で帰るじゃん」

「うっ…」

「早退するからねえ…」

「うぐっ…」

ニヤニヤしながら瑞希を弄っていると後ろからペチンと叩かれる。

「…後輩を虐めるのは推奨してない」

「いじめてません」

「あっ！薄明先輩!!」

「…ん。瑞希、類、久しい…このバカが迷惑かけた」

「おいてめえコラ、やんのか」

あまりにも散々な言われようになりちよつとイラツとしたので隠し持っていたピコピコハンマーを構えると生徒会長…薊が隠し持っていたであろうハリセンを取り出した…って、どこから出したそれ。

「いやいや二人とも!!?その二つどこから出したの!?!」

「「え？懐から？」」

「おかしいよ絶対！ねえ類！おかしいよね！」

「ふふふ、どうだろうねえ…さすがの僕も異空間を作ったりは出来ないしねえ」

「それはそれで出来たら怖いよ!？」

ナチュラルにギャグ空間へ持つていく天才が三人は不味い…！と瑞希が戦慄しているのを見て全員で首を傾げる。

「三人だけギャグ空間なのズルくない？」

「…ギャグ空間ってなに？」

「ずるいつてなんだ？」

「じエ…」

俺と薊が同時に首を傾げながら聞くと涙目になって類の後ろに隠れる瑞希。え、そんなに怖がられることしたっけ？

「ふふふ、キミたちと居ると退屈しないねえ」

「こつちのセリフだわ変人ワンツーフイニツシュの片割れコラ」

「…あまりおいたが過ぎるとめっだよ」

「ふふふ、肝に銘じておくよ」

「ただ、みんなが面白いと思うようなことなら許す。盛大にやれ」

「ん、神高が盛り上がるなら良い」

グツと親指を立てると薊も親指を立てて薄く笑う。類の後ろにいる瑞希も親指を立てて類の肩を叩く。

「…ふふ、楽しみにしててくれ」

「当然。つーか、類の演出もそうだけど司の反応も面白いよなあ」

「…ん、天馬は確かにスターの素質があると思う…芸人のスターだけど」

「あれ好きだぞ、天を翔けるペガサスと書いて天馬！全てを司ると書いて司！その名は天馬司！つてやつ」

「あははは！何それ天馬センパイそんなこと言うの!?!」

「彼の明るさは周りにいる人たちを笑顔にする魅力があるからねえ」

そういうった類の方を見て軽く笑うと尻を軽く蹴りながら笑う。

「手に入れた仲間は大切にしろよ？」

「当然さ」

「…瑞希もな」

「え？」

「俺らが気がついてないけども？」

最近瑞希はよく笑うようになった。それがどんな人たちとの関わりなのかは分からないが…その人たちが瑞希のことをちゃんと見てくれる人であることを願う。

「相談ならいつでも受け付けてるからな」

「…ん、瑞希は大切な後輩」

「…あはは、ありがとうね先輩」

「当然、僕もね」

「いやあ、類に相談はアレかなあ」

「おやあ、酷いなあ」

そんな会話をして、笑い合える日々が続けばいいのにとらしくもなく心の底から思った。出来ればここに彰人や絵名が加われば俺としては最高なんだが。

三話

あの後、薊の仕事の手伝いやらなんやらをしているとそこそこ遅い時間帯になってしまった。スマホに表示されている時計には19:27と表示されており、想定より時間がなかったことに思わず顔を顰めてしまう。

「薊、帰んぞ」

「…分かった」

靴を履き替えた薊と並んで歩く。明らかに一介の生徒会長に与える量ではない仕事をなんの文句も言わずにやる薊が見ていられず仕方なく手伝い、その関係で帰るのが遅くなるのは良くあることなので薊と並んで歩くこの道もよく見なれたものだ。

「そーいや、最近はどうよ」

「特に変わったことは無い」

「…んじゃ、前と比べてどうよ」

「そーだね…少し楽しいかな」

「そっか」

珍しく微笑んだ薊を見て笑う。二人して小さく笑い、そこで会話が途切れる。俺とこ

いつの間にこれといった会話は起こらない。話すとしても何か問題が起こったり、少しの雑談をしたり。…そんな程度だ。別に話さなくても意図は通じる。それだけだ。

「……」でいい。ありがとう」

「あいよ。おつかれさん」

「うん、お疲れさま」

薊の家の近くまで来たためそこで別れ俺は家の方向に向かって歩き出す。すると、唐突に俺のスマホに彰人からメッセージが来る。

「…はあ、またか」

そこに書かれていたのは父親と妹の絵名が喧嘩した旨のことが書かれていた。昔からそうだ。うちの父親と妹の相性は最悪…いや、というより完全に親父の自爆なのだが。言い方があるだろうと思いつつも言っていることは真理なのだからもう救えない。妹も妹でそれをバネにして成長…と言うだけでなく、極限まで傷ついて諦めそうになつて…結局諦めきれずに永遠に絵を描き続けるタイプなのでこちらもタチが悪い。いちごっこののだ。傷つける父と傷つく妹。

「やれやれ、可愛い妹の為にケーキでも買つて行つてやるかな」

丁度ここにケーキがあるよ！とばかりに店内の光の自己主張の激しいケーキ屋に向かって足を向ける。ケーキ屋に入るといくつかのケーキ…母さんや親父、彰人の分も含

めて購入しました帰路に着く。

「ただいま〜」

「おかえり…つて、ケーキか？」

「喧嘩けんわがあつたならならケーキケーキもいるだろ？」

呆れたように肩を竦めた彰人が上にいるぞと教えてくれたので彰人や母さんたちの分を冷蔵庫に入れ、絵名用に分けて入れてもらっていたのでそれを持って上がる。絵名の部屋の前に立つと扉を軽く叩く。

「誰!？」

「…俺だよ、絵名」

「…兄さん？」

「せーかい。入ってもいいか？」

「…好きにすれば？」

今回も荒れてるなど苦笑しつつもガチャリと扉を開くと目に飛び込んでくるのはバラバラに投げ捨てられた絵の具や画材、そしてその中心で蹲るようにして涙を流す絵名。

「…今回もまた随分と…」

口から漏れた呆れの声と共にさっさと絵の具や画材を一つに纏めて部屋の片隅に置

いておく。どんな風に喧嘩したのかは知らないが、恐らく今回も諦められずに描くのだろう。もう、それしか道がないのだと信じて。——そんなことは、無いんだけどなあ。

「ほら、絵名。目を擦ると赤くなっちゃまうぞ」

「…うん」

昔から絵名は俺の言うことに素直だった。…と言うより、頼れる相手が少なかったのもあるだろう。母も父も仕事で忙しく、今でこそしっかりとしている彰人も幼い頃は年相応だった。昔から早熟という言葉が相応しかつた俺が面倒を見ることも多く、その名残もあるのだろう。また涙を流し始めた絵名を軽く抱きして背中を軽く叩いていると泣き疲れたのか眠ってしまふ絵名。こうして見ると幼く見えるなど口元が緩むのを自覚しながらベッドに絵名を寝かせる。

「ま、起きたらケーキでも食べて休んで…それから色々とお悩むといいさ」

悩めよ少女よ。相談相手になってやることは出来ても、その悩みを解決してやることは出来ないんだから。

「結局、自分を救えるのは自分だけなんだから」

周りのやつはそれを手助けすることしか出来ないんだから…それがどれだけ歯がゆくとも。